GW を避け通常より１週間遅れの５月１３日（火）第１２６回「ほほえみ交流カフェ」が開催されました。

シニア	：１３名
講師	：１名
葛が谷ケアプラザ	：２名
葛が谷薬局	：１名
スタッフ	：７名
	計２４名

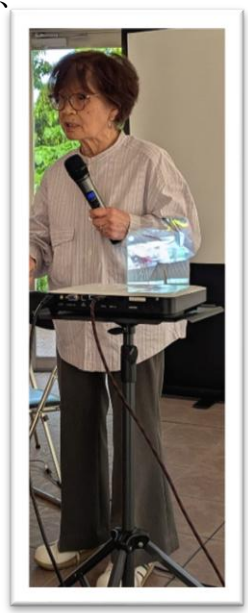
葛が谷ケアプラザはお馴染みの原看護師に加え、新たに配属となった和田看護師も初参加です。

本日の講師は“語り部”金子光一氏による「横浜大空襲体験談」

昭和２０年５月２９日朝、当時５歳だった金子氏は自宅のあった中区本郷町（本牧）でその時を迎えます。グアム島から飛来した５００機のＢ－２９が焼夷弾４０万発を投下。
その後Ｐ－51 戦闘機が機銃掃射。結果、当時の横浜市域の３４％が焼失し、死者は 7～8 千人という甚大な被害となりました。
空襲警報が鳴った時、金子さんは友人宅に遊びに行っていたそうで、自宅に戻る術もなく、近くにいた大人について山手方面に逃げたそうです。火の手が迫る中、漸く小さな公園に辿り着いて生きながらえることが出来たと。
米国は木造住宅が密集する日本の市街地を模したセットをアリゾナに作り模擬空襲を繰り返していたそうです。横浜は東京などと並び、米国の焦土作戦の主要標的となったのです。
焼け野原となった横浜の敗戦後の混乱を経て「戦争は絶対にダメ」の思いを強く抱いた語り部のお話でした。有難うございました。

金子さんのお話の後、　開戦時幼稚園の年長児だった一人のご婦人が「自分はかの戦争では、本当の意味で苦しい体験をしていない」と口を開きます。その話のポイントは三つ
・昭和 20 年 3 月 10 日、疎開先の栃木で東京方面の空が赤く染まるのを見た。

東京大空襲です。　深川にお住まいだった祖母を亡くすのですが、
母（亡くなった祖母の娘）は人前で泣くこともできなかった

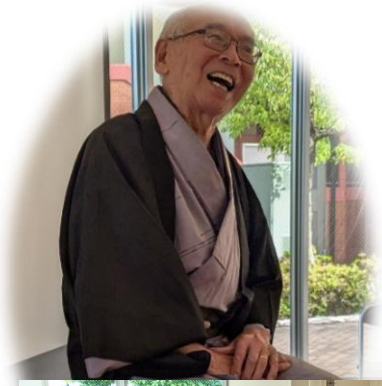


・疎開先の小学校にあった奉安殿の前を通る際に礼をせずに
教師に叱責された。
「何故礼をしなければならぬのかを担任に尋ねると『生意気だ』
と怒られた。」
その奉安殿は戦後ほどなく取り壊されたが、その際に担任から
「怒ってごめんなさいね。有難う」と言葉をかけられた。
その後、東京に戻り、街中に戦争孤児が溢れているのを目の
あたりにして、敗戦を実感した
・満州からの引き揚げ経験を持つ大学生の友人、「引き揚げ船を
待つ体育館にロシア兵が入ってきた時は一緒にいた母親に
覆かぶさって母親がロシア兵の目に留まらぬように守った」

皆さん、戦争体験は人それぞれですが、実際に恐怖に震えた体験だけではなく、
世相や社会の雰囲気に翻弄された経験も後世に語り継ぐことの重要性を改めて
感じる本日の講演でした。

5 月が誕生日の参加者は代表の小泉さんお一人。　「大先輩に負けぬように頑張る」
と決意表明。　小泉さん、これからもよろしくお願いします。

さて、お楽しみコーナーです。　“語り部”　金子光一さんのもう一つの肩書
“極楽亭とんぼ”さんの落語です。　出し物は「青葉」



仕事に入ったお屋敷でお酒をご馳走になった植木屋
さんが、お屋敷の旦那様の真似をしようと、
自宅の長屋で繰り広げるドタバタを面白おかしく
演じていただきました。
植木屋の酔った姿を演じる際は高座から転がり
落ちるのではと心配になるほどの大熱演でした。

盛沢山の内容で時間が押し、体操は割愛となり、最後は「ふれあい丘の街」の合唱でお開きとなりました。　次回は６月３日（火）です。　お楽しみに。